

2015年タイ国、ブラパ大学における国際看護論の実施：特徴ある見学を通じての学び

著者	東田 吉子, 内山 明子, 竹尾 恵子
雑誌名	佐久大学看護研究雑誌
巻	8
号	1
ページ	101-108
発行年	2016-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1050/00000183/



活動報告

2015 年タイ国、ブラパ大学における 国際看護論の実施 特徴ある見学を通じての学び

Learning outcomes of International Nursing Course at Burapha
University, Thailand — through characteristic visits, 2015—

東田 吉子 内山 明子 竹尾 恵子

Yoshiko Tsukada, Akiko Uchiyama, Keiko Takeo

キーワード：国際看護論, HIV/AIDS, 家庭訪問, 高齢者ケア, 母子保健

Key words : International Nursing Study, HIV/AIDS, home visit, elderly care,
maternal, newborn and child health care

Abstract

Saku University, School of Nursing implemented International Nursing Study (an elective subject, 2 credits, 30 hours) at Burapha University, Faculty of Nursing, Chonburi, Thailand from Aug. 24 to Sep. 2, 2015. Ten students participated in this course. The aim was to become more international so as to commit into international activities in future through studies about health and nursing condition, health care system and nursing education between Japan and Thailand. Students clarified the similarities and the differences of health situation in both countries. Basic observation was done from the first level to the tertiary level hospitals, moreover they visited HIV/AIDS anonymous clinic, Mercy Home and also did home-visits accompanied by nurses. Students of both universities did presentation on “Elderly Care” and “Maternal, Newborn and Child Health Care” of each country and exchanged opinions. At good-will party, students from six countries (Bhutan, Cambodia, Japan, Laos, Nepal, Vietnam) enjoyed each other. Saku students learned about health and medical situation, nursing education and culture of both countries, and felt cross relations among Asian countries through those experiences.

要旨

佐久大学、看護学部の選択科目、国際看護論(2単位、30時間)は、タイ国、チョンブリ県、ブラパ大学看護学部において平成27年8月24日～9月2日まで10日間実施され、10人の学生が参加した。国際社会において広い視野に基づき活動できる看護職の育成を目指し、日本とタイとの保健状況、看護教育等に関する類似点、相異点を理解することを目的としている。

学生たちは、タイの看護教育、保健医療システムについて講義を受け、第一次から第三次医療施設まで見学した。施設見学の中で、HIV/AIDSクリニック、感染者が入所するマーシー

受付日 2015年11月12日 受理日 2016年2月12日
佐久大学看護学部 Saku University School of Nursing

ホームおよび訪問看護について報告する。また、両国の学生は自国の、①高齢者ケアの状況、②母子保健状況、についてグループ発表を行い、相互に学ぶことができた。親睦交流会では、ブラパ大学看護学部で留学中のカンボジア、タイ、ブータン、ネパール、ラオス、ベトナムの学生らとの交流を楽しんだ。タイでの経験を通して、学生たちは両国の保健医療、看護、文化について学び、アジア諸国とのつながりを感じていた。

I. はじめに

佐久大学は創立(2007年)以来、国際的に活躍できる看護職の育成を目指し、2011年から4年次に国際看護論(選択科目、2単位、30時間)を置き、その学習の一環としてタイ国で研修を実施している(表1)。2014年、本学はタイ東部の中核である国立ブラパ大学看護学部と学術交流協定を締結した。これを機にチョンブリ県サンスク町に位置するブラパ大学看護学部を拠点として本コースを実施している。本年は、平成27年8月24日～9月2日まで10日間実施し、10人の学生が参加した。

両大学を取り巻く環境をみると、ブラパ大学が位置するチョンブリ県サンスク町は、バンコクから車で約1時間の海岸に面した商業の町である。ブラパ大学は、4万5千人の学生数を抱える総合大学であり、学生を含めると町の人口は10万人強となり、活気ある町である。更に、町が目抜き通りに面した大学の正門には、ASEAN10か国の旗がひらめき、ASEAN経済連合の開始に当たり、学生や市民は、国境を接している隣国を意識していることが感じられた。

一方、長野県佐久市は、東京から新幹線で1時間20分の浅間山を望む農村部が多い静かな町である。市の人口は、単科大学である佐久大学の学生を含めて10万人強である。市民の住居区域が広範囲であるため、サンスク町のように賑やかな人通りはない。このように2つの市は、同じ位の人口を持ちながら、動と静の状況にある。

II. 研修プログラムについて

プログラムの構成(表2)については、講義と見学が交互に入るように組み立てたが、一部では、受け入れ施設の都合により終日施設見学となることもあった。基本的な講義として「タイの保健医療システムと現状、および看護教育システムとその状況」、「アジアの看護教育事情など」は、昨年に引き続き講義を受けた。フィールドでは、第一次医療施設から第三次医療施設までを見学し、加えて高齢者の福祉施設、母子保健に関わる産後の家庭訪問を含む訪問を3件、HIV/AIDSクリニック、感染者が入所するホーム(Mercy Home)などを見学した。

本学の国際看護論・タイ研修の特長は、研修の最終日に、タイと日本の学生が同じテーマについて調べてきたことを発表し、学び合う場を持つことである。本年は、①高齢者ケアの状況、②母子保健の状況、をテーマにグループ発表を行った。

表1 国際看護論履修者の年次別数

実施年	2011	2012	2013	2014	2015
履修者数	5	8	9	14	10

1. 研修の実際

研修の基礎的な知識であるタイの保健医療システム、看護教育システムは、本年度も学習したが、昨年と同様であり、2014年度の研修報告として2015年発行の紀要で報告済みである。本年は、HIV/AIDSクリニック、感染者が入居するホーム(Mercy Home)、訪

表2 日程

8/24(月)	AM	タイへ出発
8/25(火)	AM PM	オリエンテーション、プラパ大学について、看護学部の見学 講義: タイのヘルスケア・システム
8/26(水)	AM PM	講義: タイにおける看護教育システム、看護職の役割 施設見学: Ban Bang-Lamoong 高齢者ケア施設
8/27(木)	AM PM	地域の活動見学: お寺の境内における高齢者の体操 第一次医療施設の見学: Subdistrict Hospital: Ban-Meong Sub-District 在宅訪問: ナースに同行し、3件の訪問を行った。
8/28(金)	AM PM	第二次医療施設の見学: Burapha University Hospital 見学: プラパ大学附属水族館 第三次医療施設の見学: Thai Red Cross Hospital (Sri Ra-Cha Town) タイ式マッサージ体験
8/29(土)	AM PM	施設見学: チュラルロンコン大学病院附属 AIDS 研究センター見学 匿名外来、検査室、Homo Sex 外来を見学 施設見学: HUMAN DEVELOPMENT FOUNDATION: 通称 MERCY CENTER/ HIV/AIDS ホーム タイの王宮見学 (写真6)
8/30(日)	AM, PM	タイの歴史、伝統文化視察、古都アユタヤを訪問
8/31(月)	AM PM	講義: タイ、アジア、世界の看護: 実情、課題および動向 第二次医療施設の見学: (通称日本病院、SamitivejSrirachaHospital (Sri Ra-Cha Town))
9/1(火)	AM PM 夕	課題発表会: ①高齢者ケアの状況 ②母子保健の状況 (写真7) 評価会 親睦交流の会 (写真8)
9/2(水)	AM	帰国の途へ

問看護、プラパ大学の学生の発表内容について報告する。

1) チュラルロンコン大学病院附属 AIDS 研究センター・HIV/AIDS クリニック

このセンターはタイ赤十字が所管しており、全国に数か所あるクリニックの1つで、HIV/AIDSの検査、カウンセリング、治療を行っており、バンコク地域の拠点である。診察を希望する者は匿名で外来を受診することができる。同じ敷地内の隣の建物は HIV-NAT と呼ばれ、1996年からオーストラリア、オランダ、タイが HIV について臨床研究を行っている。

このクリニックには、1日平均200~300人の受診者が訪れるが、そのうち約100人は他の病院からの紹介患者である。HIVの判定のための血液検査は1時間後に結果が判明する。匿名を希望する患者の診察費用は健康保険でカバーされず、100%自費となる。健康保険で支払を希望する場合は、実名で受診し、

ID番号が登録される。受診者のうち、9%が HIV 陽性。その中の20%は Homo Sex に起因する。このセンターには Homo 専用の外来があり、プライバシー保護のため診察の入口は、一般の患者とは別になっていた。陽性だとわかれば、出身地に申請して出身地の病院で治療を受けることができる。

学生たちは、HIV/AIDS クリニックの見学は日本国内も含めて初めての見学であり、タイにおける HIV/AIDS の現状に驚きながらも、貴重な体験ができたという感想であった。

2) HUMAN DEVELOPMENT

FOUNDATION: 通称 MERCY CENTER (マーシーセンター) (写真1、2)

マーシーセンターは、40年以上前から、バンコク市で最も大きなスラム街であったクロントイ (Klong Taey) 地域にある。現在のコミュニティの状況は、清潔が保たれており、かつてのスラム街のイメージない。HIV/

AIDSに罹患しており身寄りのない子ども、母子感染者を含む6歳から18歳の子どもの収容施設として、カトリック教の団体により設置された。支援者はカトリックの団体であるが、イスラム、仏教の入所者も拒まず受け入れており、国内外からの寄付によって運営されている。現在約30人が入所している。入所者にとって、このセンターが家であり、ホスピスである。子どもと親が希望すれば自宅へ戻ることはできる。自宅で、親が面倒を見ないため、再びマーシーセンターで保護する場合があるという。

タイの社会では、1990年代のようにHIV/AIDS感染者、患者に対する極端な差別や偏

見はなくなってきているが、10代の青少年の感染者の心理は複雑であり、自分自身から感染者であることを公表しない場合が多い。公表したために友人を失ったケース、公表するかどうか悩んでいるケースなどの相談にも乗っているとのことであった。

この施設の見学も学生には新しい経験であり、説明を熱心に聞いていた。最後に、学生たちは1日のジュース代を節約し、ホームに寄付を行った。

3) 訪問看護 (表3)

保健センター(Sub-District Hospital)の看護師・助産師の行っている訪問に同行させていただいた。患者の様子を看護師から聴き、



写真1 マーシーセンターで生活する子ども達の様子



写真2 マーシーセンター長から、センターの活動の説明を受けた

表3 訪問看護

ケース	療養の状況、家族の状況	訪問介護・看護の状況
成人：脳卒中 (写真3)	50代前半の男性(世帯主)、2年間在宅療養を継続、レスピレーターを装着中。家族は、患者が退院後に介護者を雇い24時間体制で看ている。	看護師、理学療法士は1ヶ月に1度訪問し、介護人に痰の吸引、手足の拘縮防止マッサージを指導していた。
新生児：生後2日目 (写真4)	第1子、生後1日で退院した若い母親(21歳)、母子共に健康な様子であった。ベビーは床に母親の傍に寝かされていた。夫(20歳)は妻のお産を機に退職し、世話をしている。夫の父親と2Kのアパート住まい。	助産師は、母親と面談、体調を伺い、悪露の診断、母乳保育の指導を行ったと話していた。
新生児：生後2週間 (写真5)	第1子である新生児は大家族の中で順調に成育している様子であった(夫の家族、妻の母親も同居)。スラム地域の中にある家で窓がないため、蚊を防ぐためベビー用の蚊帳が使われていた。	タイでは助産師は、母子の退院後2週間以内に3回訪問することになっている。助産師は母子手帳を見ながら、質問し、体重を量り、家族と対話し、助言していた。



写真3 脳卒中の患者の家庭訪問



写真4 生後2日目の新生児訪問



写真5 生後2週間目、助産師の最後(3回目)の訪問

ご家族から直接話を聞くことができた。学生は3年次に訪問看護実習を経験しているため、生活環境や育児環境など日本との違いについて学べたという言葉が聞かれた。

Ⅲ. 相互の学生による課題発表

前述の通り、本研修の特徴の1つは、ブラバ大学・佐久大学の学生が自国の「高齢者ケアの状況」および「母子保健の状況」について事前学習を行い、最終日に相互に発表し学ぶというプログラムである。本学の学生は、例年5月末に国際看護論の履修を決め、8月にタイを訪問するまでの約3か月の間に課題発表の準備を行う。本年度も各テーマについてグループで協力して調べ、総論から各論に至る意義深い発表を英語で行うことができた。

両国の学生は、看護援助の違いや考え方の違いに興味を持って質問をしていた。

今回は「タイの状況をよりよく理解する」ことを目的にブラバ大学の学生が行った発表内容について紹介する。

1. 「母子保健の状況」についての発表内容

タイにおける母乳育児の現状と実際の事例について発表された。

タイにおける10代の母親の母乳育児の割合は、12.3%でアジア諸国の中では最も低く、世界でも3番目に低い。タイでは生後6か月間は、母乳のみで育てることが推奨されている。タイで、母乳育児が成功しない理由は、①母乳の分泌が不十分、②母親が仕事を持っている、③母親の病気、である。母乳育児では、生後1時間以内に母乳を与える。完全母乳育児とは、母乳以外の食物、飲み物、水などを与えず、母乳のみで育児をすることであり、必要に応じた母乳育児とは、乳幼児が母乳をほしがるときは回数を問わず、昼でも夜でも授乳することである。また、哺乳瓶、乳首、おしゃぶりは使わない。発表された事例については、表4に示す。

2. 「高齢者ケアの状況」についての発表内容

タイの高齢化の状況と、老年看護学の学習内容について発表された。

表4 事例検討: 10代の母親への母乳育児の指導から学ぶ

(1) 対象者の紹介	母親の年齢: 16歳、職業: 無職、教育背景: 第9年生(中学卒業)、宗教: 仏教 家族構成: 夫18歳。タクシーの運転手。低収入である。夫の両親と同居。
(2) 妊娠、分娩の状況	妊娠16週から妊婦健診を始めたが、時々休むことがあった。正常分娩。
(3) 母親がもつ問題と介入	乳房の張り(怒張)による痛み 介入: ・乳房マッサージ、搾乳 ・2-3時間毎に授乳を勧める。 ・水分を補給する。 ・授乳時の乳幼児のポジションについて指導する。
(4) 乳児は母乳が飲めない	介入: ・授乳、およびLATCHスコアのアセスメント ・授乳時の乳児のポジションの指導 ・母乳を与えることを勧める。 ・乳房マッサージ、搾乳 ・毎朝乳児の体重を量る
結論	母乳育児を継続するには、「乳児の健康には母乳が最も良い」という信念に基づき、対象者へ十分な情報、授乳のスキル等を含む支援が必要である。また、母乳育児に影響を与える家族、夫、友人への説明も必要である。

高齢化については、高齢社会に突入したタイの人口推移を表す多くのグラフや地域活動の写真が使われ、佐久大学の学生にとって興味深く意義ある情報交換の場となった。

1) タイの高齢化の状況

タイの人口は、1909～1910年は約8,300,000人であったが、2015年には65,139,008人(2015年8月27日現在)と約7.8倍に増加している。それだけでなく、60歳以上の高齢者は、10,419,467人、65歳以上は6,957,902人である。2005年に60歳以上の人口が全人口の10%を超えた時点で、「高齢化社会」へ突入したと言える。タイの高齢化率は早いスピードで進んでいる。また、2011年のタイの高齢者調査では、53%が1つ以上の慢性疾患があると回答し、健康問題も課題である。慢性疾患は多い順に、高血圧、糖尿病、関節炎、心疾患、麻痺である。

2) ブラパ大学の老年看護学の内容

ブラパ大学の老年看護学は講義3単位、実習2単位で構成されている。学習の主な点は、「健常な高齢者、疾患を持つ高齢者から看取りまでのケアについて学ぶ。地域における介護者、家族が行うケアについて学ぶ。看護過程を用い、ホリスティックケア(全人的ケア)

の概念に基づき統合的に学ぶ。」である。

3) 老年看護学実習の内容

老年看護学実習は16日間で、病院実習9日間、地域保健実習3日間、高齢者福祉センター実習4日間である。タイでは、高齢者介護は自宅で行うことが主であるため、施設実習だけでなく、地域・在宅実習が行われている。

病院実習では、入院中の高齢者に対するケア、疾病に対するケアから看取りまで実習する。地域保健看護実習では、指導者である看護師および地域で担当しているヘルスポランテニアと一緒に高齢者の家を訪問する。訪問先では、高齢者のキャリアから学んだり、散髪、食事介助や服薬指導などのケアや、看取りについても実習する。施設実習は、「国立バン・バンラムン高齢者福祉センター」で行う。身寄りがなくケアをする人がいない60歳以上の高齢者が入居しており、学生は、健康教育、高血圧、糖尿病などに対するケアやレクリエーション活動を行う。

V. 研修後アンケートの結果およびまとめ

タイで10日間の研修に参加したのち、最

表5 国際看護論に関するアンケート・2014年度と2015年度の比較

2014年度 N=14
2015年度 N=10

	とても良く理解できた		まあまあ理解できた		あまり理解できなかった		ぜんぜん理解できなかった			
	2014	2015	2014	2015	2014	2015	2014	2015		
1. 講義を通じて、タイの看護教育システムおよび保健医療システムについて理解することが出来ましたか	3 (21.4)	7 (70.0)	11 (78.6)	3 (30.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
2. 施設見学を通じて、施設におけるタイの高齢者ケアについて、日本との相違点・類似点を理解することができましたか	3 (21.4)	8 (80.0)	11 (78.6)	2 (20.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
3. HIV/AIDS患者のケアについて、日本との相違点・類似点を理解することが出来ましたか	3 (21.4)	9 (90.0)	10 (71.4)	1 (10.0)	1 (7.1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
4. 施設見学を通じて、タイの看護学生の実習状況を理解することが出来ましたか	0	1 (10.0)	12 (85.7)	5 (50.0)	2 (14.3)	4 (40.0)	0 (0)	0 (0)		
5. 施設見学を通じて、タイの母子保健について、日本との相違点・類似点を理解することができましたか	4 (28.6)	6 (60.0)	10 (71.4)	3 (30.0)	0 (0)	1 (10.0)	0 (0)	0 (0)		
6. タイの第1次医療施設から第3次医療施設までの見学を通じて、日本との相違点・類似点を理解することが出来ましたか	3 (21.4)	5 (50.0)	11 (78.6)	5 (50.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
		とても そう思う		まあまあ そう思う		あまり そう思わない		ぜんぜん そう思わない		
7. 2つのトピックスによるプレゼンテーションは、両国の学生にとって有意義なものでしたか	2 (14.3)	6 (60.0)	10 (71.4)	4 (40.0)	2 (14.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
8. 国際看護論は、自身の今後の看護職としてのキャリアアップを考えるきっかけになりましたか	13 (92.9)	9 (90.0)	1 (7.1)	1 (10.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
9. タイにおける国際看護論を履修したことは有益だったと思いますか	13 (92.9)	9 (90.0)	1 (7.1)	1 (10.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
		0%	25%	50%	75%	100%				
10. 本国際看護論演習のあなたの目標達成度は何パーセントですか	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (14.3)	1 (10.0)	7 (50.0)	6 (60.0)	5 (35.7)	3 (30.0)

平均達成度 80.0%(2015) 80.3%(2014)

終日佐久大学学生にアンケートをおこなった(表5)。各講義および施設見学の目的をより明確に事前に説明を行った結果、アンケートのとおり、内容は良く理解されていた。「HIV/AIDS患者について日本との相違点・類似点を理解する」という点での理解度が高かったのは、チュラルロンコン大学病院附属AIDS研究センターの見学が効果的であったと思われる。唯一、昨年のアンケート評価よ

り低い割合は、「タイの看護学生の実習状況の理解」であった。病院で実習している様子を見学し、学生らと会話することができたが、概要のみに留まり、実習の目的や内容の詳細についての説明が不十分であったためと思われる。今後の課題として、次年度の研修内容の検討が必要である。

参加した本学の学生たちは、日本とタイとの保健医療事情の違い、看護職の責務の違い



写真6 王宮を見学



写真7 グループ発表の様子



写真8 6か国の学生が参加した親睦交流会

と類似についてしっかりと学ぶことができた
と考える。アンケートの中で、2つの質問「国
際看護論は、自身の今後の看護職としてのキ
ャリアアップを考えるきっかけになりました
か。」「タイにおける国際看護論を履修したこ
とは有益だったと思いますか。」に対し、昨年
も今年も90%の学生が「とてもそう思う。」と
回答していた。今回の経験は広く世界で活躍
できる看護職の育成の土台になるであろう。

謝辞

タイブラパ大学で本国際看護論演習を実施
するに当たり、現地でプログラム調整など多
大なご協力をいただいたDr. Puangrat
Boonyanuraku(国際看護学・助産学担当)、
Dr. Pornchai Jullamate(国際看護学・老年看
護学担当)、積極的にバックアップして
いただいたブラパ大学看護学部長をはじめ、関係
者のみなさまへ衷心より深謝申し上げます。ま
た、日々研修後に学生と付き合い、町の案内、
ショッピングなど生活の満足度を向上させて
くれたバディさんの存在も大きい。重ねて御
礼を申し上げます。なお、ブラパ大学学生の発
表内容は、本紀要へ掲載するに当たりブラパ
大学の許可を得ている。

参考文献

タイの高齢化率, 出生率, 人口 Mahidol
University, Institute for Population and
Social Research
[http://www.ipsr.mahidol.ac.th/IPSR/
PublicationGazette.aspx](http://www.ipsr.mahidol.ac.th/IPSR/PublicationGazette.aspx)